

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

TOEIC 授業における補助言語活動

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): TOEIC指導, 補助言語活動, 動機づけ キーワード (En): 作成者: 仲川, 浩世 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学短期大学部
URL	https://doi.org/10.18956/00006093

TOEIC授業における補助言語活動

仲 川 浩 世

要 旨

本稿は、TOEIC授業における補助言語活動の実践報告である。近年、高等機関、企業におけるTOEICテストの導入が増えつつある。そのため高得点取得を目的とした教材、対策講座が普及している。一方で、従来の大学受験対策のような授業は、学習者の動機づけの向上、自主学習の定着を導くとは言えないであろう。Noels (2001) は第二言語学習における動機づけを「努力、目標達成の願望、そして前向きな学習態度という全てを兼ね備えたもの」と定義づけている。学習者の動機を向上させ、自主学習を定着させる指導法の工夫は、今後の課題と考えられるであろう。本稿では、学習者自身が楽しんで学びたいという「内発的動機づけ」(Deci & Ryan 1985; Dörnyei 2001) を基にしたリスニング補助教材を提示し、その授業実践について報告する。さらに内発的動機づけを向上させるための効果的なTOEIC授業における補助言語活動について今後の方向性を考察する。

キーワード：TOEIC指導、補助言語活動、動機づけ

1. はじめに

近年、短大生や大学生の総合的な英語習熟度の低下が問題視されている。この補完教育として、リメディアル教育¹⁾ が盛んになりつつある。英語習熟度に関する問題点としては、学習意欲の低下、自主学習習慣の不足などがあげられる。従って、英語習熟度を上げるためには、英語を学びたいという動機づけを高めること、また自主学習習慣の定着が不可欠であると考えられる。

一方、文部科学省による「『英語が使える日本人』のための育成行動計画」²⁾ (2003) の策定以来、「英語コミュニケーション能力」の重要性が唱えられている。ここで示す「英語コミュニケーション能力」とは単なる英会話のことではない。国際社会や企業などの仕事現場で、「コミュニケーションの道具」として「使える英語」のことを指している。経済や社会のグローバル化に伴って、「国際語」としての英語の重要性はますます高くなってきた。そのため、グローバルな人材育成という目的を少しでも達成するためには「コミュニケーションの道具」として「使える英語」を向上させる必要があると考えられよう。

上記の「英語コミュニケーション能力」育成の必要性という現状から、高等教育機関や企業

では、英語力を測る基準として、TOEIC (Test of English for International Communication) の導入が試みられている。実際、その数は年々増えつつある。高等教育機関では、TOEICが単位取得や入学試験、また企業においては就職試験の際に利用されている。そのため、多くの高専、短大、大学では、現在TOEIC対策授業が実施されている。

しかし、TOEIC対策の授業のみでは、英語コミュニケーション能力の育成には不十分であるという報告もある。Cunningham(2002) はTOEICのスコアとコミュニケーション能力 (communicative abilities) との間に相関関係があるかどうかを調査した。その結果、TOEICのスコアアップが学習者のコミュニケーション能力の発達に関連しているとは必ずしも言えないと述べている。「使える英語」を促進させるためには、今後更なる研究が必要であろうとも提案している。

従って、最終的にはコミュニケーション能力を伸ばし、学習習慣を定着させられるような指導法が必要であると言えよう。そのためには、学習者が意欲的に学び、学習者の「動機づけ」を高めるような授業作りをすることが望ましい。また、教員はTOEIC授業内で使用する教材や教授法を工夫して、実践していくことが必要であろう。

本稿では、まずTOEIC導入の現状について言及する。次に動機づけ理論に基づいた学習方法に関連した先行研究について述べる。そしてTOEIC授業における補助言語活動の実践報告を行う。最後にこれからのTOEIC授業指導の可能性について言及する。

2. 研究の背景：TOEIC導入の現状

TOEICは英語によるコミュニケーション能力を総合的に測るテストである。出題内容は日常生活に関連したものからビジネスにおけるものまで幅広い。TOEICは合否ではなくスコア (結果) によって評価される。

TOEICは英文のみで構成されている。Listening Section と Reading Section から成っている。それぞれ100問ずつであり、解答時間はListening 45分、Reading 75分である。英文和訳・和文英訳といった設問は出題されない。マークシート方式で、Part 2 の選択肢が3択以外は、全て4択である。スコアのトータルは10点～990点となっている。

TOEICは会社員や就職を控えた学生などが数多く受験する。日本でのTOEICの実施は1979年に初めて行われた。その当時は、約3000人程度が受験していただけただけであった。2011年9月現在では、年間227万人もの受験者が存在する³⁾。TOEICの需要はこれからも高まるであろう。

TOEICは米国の非営利テスト開発機関であるETS (Educational Testing Service) が開発・制作している。日本ではETSと提携している財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 (The Institute for International Business Communication, IIBC) TOEIC運営委員会がTOEIC

事業に取り組んでいる。IIBCはETSと連携し、TOEICの実施、関連調査などを日本で促進している。TOEICを英語力判定の指針に活用している大学・企業は増加傾向にある。IIBCによれば公開テストのほか、団体特別受験制度（Institutional Program、IP）があり、企業や学校単位で実施されている。就職活動の際、どちらのテストの結果であっても、同等に英語力の証明として用いることができる。

大学入学前・在学中・就職活動の際においてTOEICの果たす役割は大きい。IIBCは「TOEICテスト 入学試験・単位認定における活用状況」（2011）を発表した。これによると高等教育機関 調査実施校、合計1194校（大学・短期大学・高等専門学校）のうち、入学試験にTOEICを活用しているのは377校、また429校が単位認定校である。外国語専攻の学部などでは大学内でのIP TOEIC受験を積極的に導入し、TOEIC講座の授業を行っている。また就職対策のためにTOEICを奨励している理工系の大学（本計 2003）もある。しかし、その他の学部では、TOEICそのものはまだあまり重要視されていないというのが現状である。

就職氷河期と言われている現在、TOEICで高いスコアを取ることは、大学生に要求されるものとなりつつある。入社後もTOEIC受験を義務付け、社内での配属、昇進の目安とする企業も少なくはなく、近年TOEICはますます重要視されつつあると言えよう。2012年度のTOEIC Newsletter No. 114によれば、大卒新入社員の平均スコアは499点であった。また、内定者を対象に実施したテストでは、平均は525点と報告されている。「『TOEIC大学就職課調査』・『上場企業における英語活用実態調査』調査報告書」（2011）によれば、「8割の企業が採用時に新入社員のTOEICスコアを参考にする」と述べている。

このように大学側も企業側もTOEICのスコアを重要視しつつある。具体的には、大学側が就職活動生に求めるスコアは600点である。また、企業側の求めるスコアは550点である。しかし実際の現段階の点数は求められるスコアに到達していない。そのため企業が求めるTOEICのスコアと実際の大学生のスコアには差が生じている。今後ますます英語力を示す客観的なテストとしてTOEICの活用は定着するであろう。

3. 研究の目的：TOEIC指導とコミュニケーション能力の育成

TOEICは英語力を測る指針として、近年重要視されている。しかし、果たしてTOEIC対策のための指導は、本当に英語学習のための動機づけを高めるきっかけになると言えるのであろうか。

コミュニケーション能力の育成に必要な要素については、語彙力の幅（Vocabulary Size）が広げればより実用コミュニケーション能力が発達する（中條他 2002）という研究も行われている。Lauer（2006）はコミュニケーション指導の欠如に対して、語彙と文法力の強化を指摘している。学習者のコミュニケーションにおける強い部分と弱い部分を把握していれば効果

的に学習者を導き、指導することが可能であるとも述べている。

TOEIC指導のためにテクニックだけに依存することは、コミュニケーション能力を育成するということとは異なっている。しかし、TOEICテストの問題パターンの分析をし、授業内でTOEIC指導を行うことはコミュニケーション能力を育成させるのに効果的ではないかと考えられる。

鈴木(2009)は、短期間で点数を伸ばすことができるリスニング指導法を提示している。TOEICに関係のないCDを聞かせるというリスニング演習を行うよりは、TOEICのリスニングのテクニックをまず明示し、「設問パターンの分析」をさせることの意義を主張している。このような「設問パターンの分析」の利点について、「学生たちは、リスニング能力だけではなく、気がつかないうちに簡単なエッセイやビジネス英文ライティングの能力も向上させることができるかもしれない。設問分析によるTOEICリスニングのテクニックには、このように、英文ライティングのように他につながる可能性がある」と述べている。

TOEIC導入の現状とTOEIC指導とコミュニケーション能力育成について言及してきた。上記の先行研究から「使える英語」としてのコミュニケーション能力育成には、語彙力・文法力の強化は不可欠であり、TOEICの形式に慣れていない学習者や、習熟度の低い学習者の場合には何らかのTOEIC対策演習を行うことは有効であると言えよう。

しかし、資格対策のみの演習型授業は、英語のコミュニケーション能力育成に有益であるとは言い難い。単なる英会話ではない、「使える英語」としての発信型英語力の育成のためには、TOEIC対策を踏まえたうえで、学習者の動機づけが向上するリスニング、リーディング補助教材を教員が考案し、言語活動を実施することが必要ではないだろうか。さらに、自主学習の習慣をつけることを目的とした学習者とのコミュニケーションが不可欠である。最近では、電子メールや大学のCall (Computer Assisted Language Learning) システムを利用して、教員と学習者間のコンタクトが学外からでも容易になっている。そのため、具体的な学習支援に関連した教員のアドバイスや、学習習慣が定着するようなフィードバックが学習者の動機づけを高めることになるのではないかと考える。

4. 動機づけとは

次に動機づけについて着目したいと思う。ここで述べる第二言語学習における動機づけとは、「努力、目標達成の願望、そして前向きな学習態度の複合物 (a complex of constructs, involving “the combination of effort plus desire to achieve the goal of learning the language plus favorable attitudes toward learning the language”)」だと定義する (Noels, 2001)。田中(2010)は動機づけを「学習者の授業態度、授業外での自主学習の質や量、あるいは学習成果

を決定する要因」であると言及している。

Gardner & Lambert (1972) は、動機づけの概念を広義において以下の二つに分類した。それらは、学習者自身が自ら進んで意義を見つけ、楽しみのために学習をするintrinsic motivation（内発的動機付け）と学習結果などの報奨のために学習をするextrinsic motivation（外発的動機づけ）である。内発的動機を持つ学習者は、教師の介入がなくても自らが主体的に学ぼうとするため、外発的動機より望ましい（Williams & Stockdale, 2004）とされる。従って、長期的な学習には、自己の成長を目指して学習しようとする内発的動機が重要になる（Brown, 2000）。

さらにGardner & Lambert (1972) の研究以降、動機についての研究は、理論型、及び実践型という二種類のアプローチで続けられている（cf. Dörnyei & Schmidt 2001; 田中2010）。特にDörnyeiは、授業における動機づけを高める英語指導ストラテジーを研究している。そして、動機づけを維持し、高めていくことを検証している。このような動機づけの先行研究を基に、最近では、TOEIC指導において動機づけを高める研究も報告されている。田上（1999）はTOEICを利用した動機づけについて論じている。また、Mizumoto & Takeuchi (2008) はTOEICの語彙学習と動機づけに関連する実践研究を発表している。そして、語彙学習の動機づけが高い学習者ほどTOEICで高得点を取得していると述べている。

テストで高得点を出したいという学習者の学習姿勢は、テストの結果や報奨のために学びたいという外発的動機づけが基になっていると考えられる。そこで、TOEIC指導に関する授業においては、まずテストで高得点を取るということを目指した外発的動機の向上を目指し、最終的には学習者が楽しんで授業に取り組むことができる内発的動機の向上を目的とする。そのためには、使用教材と指導法の工夫を基に考案した補助言語活動の導入を提案したい。

次にTOEIC対策の補助言語活動を実践する際に考慮すべき点について述べたい。現段階では、調査を始めたばかりであるが、今後心掛けておくべき要素だと考える。

1. 学習者のニーズ、レベルを把握する
2. TOEIC対策を行なう
3. 語彙・文法力を強化する
4. コミュニケーション活動を促進するアクティビティを盛り込む
5. 自主学習の習慣をつける課題を課す
6. アドバイスなどを与え、学習者の自律を促す手助けをする

5. 授業実践

TOEIC授業で、動機づけ理論を基に考案した補助言語活動の実践を行った。対象学生は私立外国語大学短期大学1年生である。この授業を実施した平成23年度の短期大学生全学年の

平均のTOEICスコアは平均446点である。このスコアは1年生対象の選択必修科目、二つのTOEIC対策授業にて実践を行った。学生数はそれぞれ36名、24名であった。学習者のTOEICの平均点は、講座開始当初約430点であった。これは60名中実際にTOEICテストを受験していた29名のみの平均点である。しかしこの中には、既に500点以上を取得しているものも5名(515点、530点、570点、590点、610点)いた。このようなことから、習熟度の低い学習者用のTOEIC対策を念頭においたTOEIC Listening Section Part 1(写真描写問題)を参考にして、オリジナルのアクティビティを作成した。その実践内容を以下に示す。

実際のPart 1問題の形式は、写真を正しく描写している4つの英文から1つを選ぶというものである。まず、Part 1の例題を示し、学習者が問題文で使用される英文の構造に着目できるように手助けをする。例えば、写真描写問題で使用される文法的な特徴を確認するように促す。現在の動作や状況を説明するため、現在進行形の使用頻度が高く、また人物や物の位置関係を表すために必要な場所を表す前置詞・句前置詞(in front of ~、next to ~)などの語句にも注意するよう指導する。

そして、例題とは別の写真が印刷された用紙を配布する。辞書の使用を許可し、写真を描写する英文を作成するよう指示する。以下の写真からは「公園で楽器を弾いている人 (be playing musical instruments in the park)」、写真前方にある「低木 (shrub)」や「通り過ぎる (pass by)」などの表現の使用も考えられよう。

このアクティビティとは別に毎週TOEIC語彙の強化や演習問題を含む教科書に基づいて授業を進めている。そのためかもしれないが、学習者たちは比較的積極的に必要な語彙を選択し、英文作成に取り組んでいる。

【アクティビティ例1】 写真描写演習問題

- ①以下の写真を英文で描写しなさい。
- ②グループになって、作成した英文を交換し、文法・語彙などの間違いを訂正し合いなさい。
- ③グループで正しい英文を討議し、出来上がった英文を発表しなさい。



(写真1) Tune In to the TOEIC Test マクミラン ランゲージハウス p.19 筆者著より

6. 研究結果：英文例及び自由記述

実際にこのオリジナルのアクティビティを英語専攻の短期大学生を対象としたTOEIC授業内で実施し、学習者の反応を調査した。

まず、60名に上記の方法で写真を描写する英文を作成させた。また、個人で英文を作成後、4人1組のグループでお互いに作成した英文を交換し、学習者間で文法や語彙の誤りを確認させた。わからない語彙を教え合ったり、作成する英文について話し合ったりする時間を設けた。最終的に、グループごとにひとつ英文を選び出し、代表者に板書させた。

以下に英文例をあげておく（学習者が実際に授業内で作成した英文そのままである）。

A man and a woman are playing the instruments.
A parent and a child are walking hand in hand over the street.
A truck is being parked at the side of the road.
A woman has a string.
A woman is walking with a rope.
Some people are playing musical instruments on the street.
Some people are playing the instruments around the bench.
There are many people near the bench.
There are some people in the square.
There are ten people.
There are three people who are playing street live.
There is a building across the street.
There is a white car on the road.
There is a woman playing the violin in front of a bench.
The family is listening to musician's performance.
The man and the girl are walking hand in hand at the sidewalk.
The man playing the guitar who standing side of bench.
The man wearing white shirt is playing the guitar near the bench.
The obesity woman is passing through a band.
The woman is sitting on the bench.

（表1） 学生による英作文

また、以下はアクティビティ終了後、学習者が感じたことの自由記述の一部である。英作文が苦手な学習者はこのアクティビティを少し難しいと感じたようであった。しかし、ほとんど

の学習者は積極的に取り組んでいた。自由記述を回収した結果、二つの点が明らかになった。

1. 教室内のコミュニケーションが活発化した点

* <u>自分が着目しないところに目をつけて考える人もいるので、その人の文章を見るのが楽しかった</u> です。
* 簡単なことを表現するのも意外と難しかったです。 <u>グループ</u> であるということで、いろいろな表現方法がわかった。
* <u>いろんな人の観点</u> がわかるし、おもしろいと思った。
* 自分では思いつかないような英文が出てきておもしろかった。
* 英作をしてそれをグループ同士でdiscussionすることによって相手の意見も聞けて、自分の間違いに気づくことができるので良いと思いました。
* このようなactivityは楽しいです。 <u>友達も増えるし。この機会がいっぱいあればいいな</u> と思います。

2. 学習者の言語構造に対する意識が高まった点

* このactivityをして <u>文法力や語彙力がまだまだ足りない</u> と思いました。 <u>楽しく学ぶことが</u> できました。
* これからTOEICを受けるときの <u>写真を見て考える力</u> がつくと思うし、意識も変わってきました。
* 簡単な単語や文法でも言い表す方法がいろいろあるので、 <u>おもしろい</u> と思いました。
* 意外なものがあって楽しいし、 <u>自分の表現力も上がりそう</u> だと思った。
* 自分だったらこうやって言うという考え方がついた気がする。同時に言いたくても表現がわからなくて言えないものもあったので、それを自分で考えることにより考えが身についたと思う。
* 普段、絵を見て英文を作る機会がないので、 <u>頭の刺激</u> になりました。
* もう少し、 <u>凝った文章が書きたかった</u> のですが、なかなか思いつきませんでした。
* できるだけ長い文を書こうと意識すると、 <u>文法があっているか不安</u> になる。ほとんどのグループが演奏している人について書いてあったので、他の所に目をつけたらよかった。
* 1つの写真でも深く考えてみないといけないなと思いました。今までしたことなかったのも、おもしろかったです。 <u>いろんな文法をもっと使わないと忘れている</u> なと実感しました。
* <u>文を作ることで文法のミスもわかる</u> し、いい勉強になると思いました。
* <u>写真をよく見る</u> ことと英文をぱっと作る練習になると思うので、よいと思います。

(表2) 学生による自由記述

習熟度が低い学習者の場合は、辞書の使用を許可していたにもかかわらず、描写に必要な語彙を用いて英文を作成するだけでも難易度が高かったようである。もっと日頃から語彙を強化することが重要であると考えられる。

学生の自由記述結果が示しているように、自分の作成した英文をグループで討議することによって学習者同士がコミュニケーションを図り、教室内活動が活発化する。そして、学習者間で語彙、文法力への意識が高まったことが見受けられる。さらに教師が誤りを指摘せずとも、学習者がお互いに助け合って正しい英文を作成しようとする。すなわち、この補助言語活動によって、学習者間のコミュニケーションが活発化すること、言語構造に対する認識が高まること、その上英語で発言や質問をするなど、英語学習において意欲的な姿勢を見せるようになることが明らかになった。

自由記述が示しているように、ほとんどの学習者がこのアクティビティの実践に対して「楽しかった」と言及している。また、語彙力、文法力の不足に対して、学習者自らの向上心が高まったとも言えよう。従って、このアクティビティを用いた補助言語活動によって、学習者が意義を見つけて主体的に楽しんで学習する「内発的動機」を向上させることができたと考えられる。

リスニング・アクティビティを通じて、グループ内のコミュニケーション活動を発達させ、自分の学習意識や意欲を高めるきっかけとなったことが補助言語活動から判断できた。これは「自律した」学習者への足がかりであると言える。Dickinson (1992) によれば「自律した」学習者とは、自分の学習に対して責任を負うことであり、自己の学習方法・結果をモニターし、自分が掲げた目標を達成できているか自己評価を行うことができる学習者を表す。このように「自律した」学習者の育成が「使える英語」指導には必要となるのではないか。今回実施したのは、リスニング・アクティビティだけであったが、これからも授業中に学生間のコミュニケーション活動が活発化し、内発的動機が高められるような補助言語活動を考えていく必要がある。

7. 教材開発：リーディング・アクティビティ（ライティング・アクティビティへと）

補助言語活動ではリスニング・アクティビティのみを行なった。ここでは、今後の参考として、リーディングのアクティビティを提示しておく。以下は英文の電子メールのサンプルである。まず、プロジェクターに英文を映し、学習者に問題を解かせる。既に解き方の対策、教科書などの問題演習を毎回の授業で行なっているため、さらに進んだ学習法が必要である。もしTOEIC対策のみを行なうのであれば、実際に問題を解き、skimming, scanningなどを用いて、解説するだけでよいであろう。しかし、「使える英語」を習得させるという目的を学習者に持たせることが、このアクティビティのねらいである。そこで、各自がサンプルを参考にし

て、英文の電子メールを書いてみることを提案する。従って、このアクティビティはライティング・アクティビティへの準備段階になるとも考えられる。まず、英文の形式（例えば、受信者、送信者、件名などの形式）を指導する。特に実社会において有益であると考えられる内容の電子メール（例 ビジネスレターなど）を提示する。本文の題材は、「会議の日付の変更依頼」である。多少難易度が高いかも知れないが、形式を把握して、固有名詞などを変更すれば電子メールを書くことも不可能ではない。その後、学習者同士で、電子メールを交換したり、教員へ電子メールを送信したりするということを行い、さらにコミュニケーション活動を発展させることも可能ではないかと考える。

【アクティビティ例2】読解問題：電子メール

Questions 1-3 refer to the following email.

To: Ms. Bonnie Carter

From: Mary Su

Subject: Re: Next meeting

Date: October 5

Although our next meeting is set for October 17, I have to ask you to change the date. I'm leaving tomorrow for New York to see Eric Walker and Robert Smith of New York Paint to discuss the upcoming exhibition. I plan to come back on October 12. However, I heard the news of a possible airline's strike. If that happens, I'm not sure whether I'll be able to be back as planned. Would it be possible for us to have the meeting on October 25 or 26?

Please give me a call at your earliest convenience.

Mary

1. Who is travelling to New York?

- (A) Bonnie Carter
- (B) Mary Su
- (C) Eric Walker
- (D) Robert Smith

Answer: (B)

2. What is the purpose of the meeting?

- (A) To discuss an airline strike
- (B) To talk about the next exhibition
- (C) To discuss the cancellation of the upcoming exhibition
- (D) To talk about the sales presentation

Answer: (B)

3. What is Bonnie being asked to do about the meeting?

- (A) To postpone the meeting
- (B) To call off the meeting
- (C) To hold the meeting as scheduled
- (D) To bring his boss to the meeting

Answer: (A)

今後の実践例には、アクティビティ例2と同様の趣旨の電子メールをグループで作成させ、発表させるということも考えられよう。さらに学習習慣を定着させるために、アクティビティに関連した課題を与えることも必要である。例えば、授業中に作成した学生のオリジナルの電子メール（英文）を授業外で修正し、その日習得した語句を復習させるといった授業外学習の充実などがあげられよう。そして、出来上がった電子メールを教員に提出させる。教員は返信をして、その電子メールにフィードバックを行うことで、学習者の動機を高めることができる。外発的動機を高めることのできる資格対策のクラスにおいて、内発的動機を高めるような補助言語活動をさらに実施していく必要がある。

8. おわりに：今後の課題

本稿では現在英語コミュニケーション能力測定の基準となっているTOEIC授業における補助言語活動の実践について報告した。現在TOEICのニーズは就職、大学進学、単位認定と幅広い。テスト対策重視の教育が批判されがちとは言え、もはやTOEICの存在は不可欠になりつつある。英語教育現場の現状には課題が多々存在しているが、教員として学習者の意欲を向上させ、学習習慣の定着を図ることができるような指導を常に心掛けたい。

今回の補助言語活動を取り入れたTOEICクラスを振り返って今後の課題について述べておきたい。もちろん、受講者全員がスコアを伸ばしたわけではない。全員にTOEICテストの受験を促してはいたが、8名の受講者はTOEICテストを受験しなかった。また、実際に5名の

受講者の点数は、495点から415点、440点から360点、515点から430点、530点から460点、610点から585点へと下がってしまった。これらの学習者を分析してみると、点数の下がってしまった学生や受験をしなかった学生に見られる共通点は、日頃の授業への出席状況が良くなかったということである。また、授業内外におけるアクティビティや演習問題、宿題に対する取り組みがスコアの伸びた学習者に比べて消極的であった。これは学習者と教員とのコミュニケーションが欠けていたことが理由であるとも言えよう。今後取り組むべき最も大きな問題点の一つである。

このような課題もあるが、全体的にはTOEICテストに対して前向きに取り組み、講座終了時には著しく点数を伸ばしたものもいた。その一例をあげておく。

	講座開始時	講座終了時
A	215点	285点
B	255点	325点
C	285点	330点
D	355点	490点
E	355点	510点
F	395点	650点
G	405点	480点
H	415点	495点
I	475点	525点
J	490点	545点
K	590点	655点

(表3) 学生のTOEICスコアの伸び

今回の実践報告はTOEIC授業における補助言語活動といった、予備的な試みに過ぎず、今後の指導における可能性についてさらに調査を重ねていく必要がある。そのためには学習者のレベルや、学習習慣の特徴、ニーズを調査し分析することが求められよう。そして、教材の提供、指導方法の充実、TOEICを利用した英語指導において長期的なリサーチが必要となるであろう。

注

- 1) 2005年にリメディアル教育学会が設立された。
- 2) 文部科学省は2002年7月「『英語が使える日本人』育成のための戦略構想」を踏まえて、その翌年の2003年3月「『英語が使える日本人』育成のための行動計画」を策定した。それ以来、発信型英語力

の強化のために英語教育の改善が支援されている。具体的には各高等機関での授業改善プログラムの実施活動、英語教員の研修導入、そして2011年度からの正式な小学校英語活動の開始などが挙げられる。

- 3) 現在、TOEICプログラムは世界約120ヵ国で実施されており、受験者は年間約600万人（2010年1月～2010年12月）である。

参考文献

- H. Douglas Brown (2000), *Principles of Language Learning and Teaching* (4th ed.), New York: Pearson Education.
- Cynthia R. Cunningham (2002), *The TOEIC Test and Communicative Competence: Do Test Scores Gains Correlate with Increased Competence? A Preliminary Study*. University of Birmingham, Masters of Arts in Teaching English as a Foreign or Second Language (TEFL/TESL) Dissertation.
- Edward L. Deci and Richard M. Ryan (1985), *Intrinsic Motivation and Self-Determination in Human Behavior*. New York: Plenum.
- Leslie, Dickinson (1992), *Learner Autonomy 2: Learner Training for Language Learning*. Dublin, Authentik.
- Dörnyei, Zoltan (Ed.) (2001), *Motivation and Second Language Acquisition*. Honolulu, HI: University of Hawaii Press.
- Gardner, Robert C. and Lambert, Wallace E. (1972), *Attitudes and Motivation in Second-Language Learning*. Rowley, MA: Newbury House.
- Lauer, Joe (2006), The Grammar-Vocabulary Abilities of Japanese University Freshmen on the TOEIC : 日本人大学生のTOEICのための文法的・語彙的能力に関する考察.『広島外国語教育研究』9, 53-61.
- Mizumoto, Atsushi and Takeuchi, Osamu (2008), Exploring the Driving Forces Behind TOEIC Scores: Focusing on Vocabulary Learning Strategies, Motivation, and Study Time. *JACET Journal* 46, 17-32.
- Kimberly, A. Noels (2001), "New Orientations in Language Learning Motivation : Towards a Model of Intrinsic, Extrinsic, and Integrative Orientations and Motivation," *Motivation and Second language Acquisition*, ed. by Zoltan Dörnyei, 43-68, Second Language Teaching Curriculum Center, University of Hawaii.
- Robert L. Williams and Susan L. Stockdale (2004), "Classroom Motivation Strategies for Prospective Teachers," *The Teacher Educator*, 39(3), 212-230.
- 財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 『TOEICテスト 新公式問題集 Vol. 5』
一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会、2012年。
- 財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 『TOEICテスト 入学試験・単位認定における活用状

- 況』、2011年。
- 財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 『「TOEIC大学就職課調査」・「上場企業における英語活用実態調査」調査報告書』、2011年。
- 鈴木淳 「「TOEICリスニングの指導法」－テクニックの是非をめぐって－」『川内レビュー』 8号、2009年、64-74頁。
- ゾルダン・ドルニィ 『動機づけを高める英語指導ストラテジー』 米山朝二・関昭典訳 大修館、2005年。
- 田中博晃 「英語の授業で内発的動機づけを高める研究」 *JACET Journal*, 50号、2010年、63-80頁。
- 田上優子 「TOEICを利用した学習の動機づけ」『福岡女子大学文学部紀要「文藝と思想」』 63号、1999年、77-90頁。
- 中條清美・竹蓋順子・高橋秀夫・竹蓋幸生 「語彙力と実用コミュニケーション能力の関係」『Language Education & Technology』 39号、2002年、105-115頁。
- 本計義文 「近畿大学工学部学生の英語能力の現状：TOEICスコアおよび語法理解の分析による適正目標設定の試み」『近畿大学工学部紀要 人文・社会科学篇』 33号、2003年、51-66頁。
- 諸川重剛・神埼謙一・萩野勝 「TOEICを取り入れた新しい英語授業の試み」『岡山大学環境理工学部研究報告』 第6巻1号、2001年、107-118頁。

(なかがわ・ひろよ 短期大学部准教授)